

# サブタイプ化における認知資源の役割(1)<sup>1) 2)</sup>

佐久間勲

## The role of cognitive resources in subtyping (1)

Isao Sakuma

### Abstract

Subtyping is a cognitive mechanism which isolates stereotype-inconsistent members from superordinate group and preserves stereotypes. The present study examined the role of cognitive resources in subtyping. In two experiments, distracted and nondistracted participants completed tasks (judgments of target group and group members, memory for group members, and typicality judgments of stereotype-inconsistent members) after they received stereotype-consistent and stereotype-inconsistent information about target group members. It was found that nondistracted participants perceived target group (member) more stereotypical than distracted participants. However, the differences between distracted and nondistracted participants were not found in memory and typicality judgments. These results were discussed in terms of subtyping and another cognitive mechanism.

### 問 題

本研究は2つの実験を通して、知覚者の認知資源(cognitive resource)がサブタイプ化(subtyping)において果たす役割を検討する。

#### ステレオタイプ変容とサブタイプ化

サブタイプ化とは、ステレオタイプに一致しない成員を集団から切り離して、それらの成員をもとに新しい下位集団(サブタイプ)を形成する認知的メカニズムである(Mauer, Park, & Rothbart, 1995; Weber & Crocker, 1983)。ステレオタイプに一致しない成員は、ステレオタイプから切り離されるために、集団全体に一般化されることはなくなる。その結果、ステレオタイプに一致しない成員に遭遇しても、ステレオタイプは変容しない。

たとえば伝統的な性役割観に基づくステレオタイプとして「女性は仕事に向かない」という性別ステレオタイプがある。こうしたステレオタイプを持っている人が「仕事ができる女性」に遭遇しても、ステレオタイプはなかなか変容しない。なぜならば「仕事ができる女性」は「キャリアウー

マン・タイプ」というように女性集団から切り離されてしまい、女性集団全体に一般化されないからである。その結果、「女性は仕事ができない」というステレオタイプは変容せず、そのまま維持されてしまうのである。

### サブタイプ化における認知資源の役割

Zoë & Hewstone(2001)は、サブタイプ化の生起に影響する主要な認知的要因として、次の2つを指摘している。

ひとつは、ステレオタイプに一致しない情報の提示方法である。ステレオタイプに一致しない情報を同じ数だけ提示したとしても、それらの情報が多くの個人に分散しているときよりも、特定の個人に集中しているときの方が、サブタイプ化は生起しやすい(Johnston & Hewstone, 1992; Johnston, Hewston, Pendry, & Frankish, 1994; Hewstone, Macrae, Griffiths, Milne, & Brown, 1994)。

もうひとつは、知覚者の認知資源である。サブタイプ化は、ステレオタイプに一致しない成員を切り離し、それらをもとに、新しい下位集団を形成することである。新しい下位集団を形成するためには、なぜステレオタイプに一致しない成員がいるかを考えたり、その理由づけをしたりする必要がある。そしてこうした認知活動に従事するためには、資源(認知資源)が必要になる(Moreno & Bodenhausen, 1999; Yzerbyt, Coull, & Rocher, 1999)。

実証的研究でも、サブタイプ化において認知資源が重要な役割を果たしていることが示唆されている。Yzerbyt et al.(1999; Experiment 2)は、知覚者の認知資源を実験的に操作した上で、ステレオタイプに一致しない成員がターゲット集団の知覚に及ぼす影響を検討した。その結果、相対的に認知資源がある条件では、ステレオタイプに一致しない成員を提示された後でも、ターゲット集団をステレオタイプの的に知覚していた。その一方、相対的に認知資源が欠乏している条件では、ターゲット集団をステレオタイプの的に知覚していなかった(ステレオタイプの判断が低減していた)。また相対的に認知資源がある条件では、認知資源が欠乏している条件と比較をして、ステレオタイプに一致しない成員の典型性を低く知覚していた。これらの一連の結果は、相対的に認知資源がある条件で、ステレオタイプに一致しない成員をサブタイプ化していた可能性を示唆している。

本研究も、Yzerbyt et al.(1999)と同様に、知覚者の認知資源に注目する。そして知覚者の認知資源がサブタイプ化において重要な役割を果たしているかどうかを検討する。具体的には、2つの実験を通して、「知覚者の認知資源があるときにサブタイプ化は生起する」という概念仮説を検証する。

### サブタイプ化の測定方法

サブタイプ化を測定する方法にはいくつかある(Hewstone, 1994; Park, Wolsko, & Judd, 2001)。本研究では、サブタイプ化を測定する方法として次の3つの方法を使用する。

第一の方法は、成員の記憶の測定である(Johnstone et al., 1994)。社会的カテゴリー化に関する研究では、カテゴリー化を測定するためにname-matching paradigmが用いられている(Taylor, Fiske, Etcoff, & Ruderman, 1978)。この方法ではカテゴリー化が起きると、異なるカテゴリー(集団)に分類された成員同士の記憶の混同(これを「集団間エラー」と呼ぶ)と比較をして、同じカテゴリー(集団)に分類された成員同士の記憶の混同(これを「集団内エラー」と呼ぶ)が多くなることが指摘されている(Taylor et al., 1978)。本研究で取り上げるサブタイプ化も、ステレオタイプに一致する成員と一致しない成員とに分類をするという点で社会的カテゴリー化と同じメカニズムと考えられる。したがって社会的カテゴリー化に関する研究の知見をサブタイプ化の問題に適用すると、サブタイプ化が生

起している場合、異なるカテゴリー(集団)に分類される成員同士、つまりステレオタイプに一致する成員と一致しない成員の記憶の混同(本研究ではこれを「上位-下位集団間エラー」と呼ぶ)と比較をして、同じカテゴリー(集団)に分類される成員同士、つまりステレオタイプに一致する成員同士またはステレオタイプに一致しない成員同士の記憶の混同(本研究ではこれを「上位集団内・下位集団内エラー」と呼ぶ)が多くなるだろう。逆に、サブタイプ化が生起していない場合、上位-下位集団間エラーと上位集団内・下位集団内エラーとの間に大きな差は見られないだろう。

第二の方法は、ターゲット集団および成員に対する知覚の測定である(e.g., Johnston et al., 1994)。すでに述べたようにサブタイプ化はステレオタイプ変容を妨げる認知的メカニズムである。したがって、サブタイプ化が生起した場合、生起しなかった場合と比較をして、ターゲット集団および成員に対する知覚がステレオタイプの的になるだろう。

第三の方法は、ステレオタイプに一致しない成員の典型性の知覚の測定である(Johnston & Hewstone, 1992; Yzerbyt et al., 1999)。サブタイプ化される成員は、ステレオタイプから切り離される。その結果、サブタイプ化された成員は、その集団の成員らしくない、典型性が低いと判断されるであろう。

これらの3つの測定方法のうち、第一と第三の方法は、サブタイプ化をより直接的にとらえようとする方法と考えられる。一方、第二の方法はサブタイプ化を間接的にとらえようとする方法と考えられる。<sup>3)</sup>

## 予備調査

本研究で使用するステレオタイプおよび記述文を選定するために2つの予備調査を実施した。

### ステレオタイプの選定

一橋大学および東京学芸大学で心理学関連の講義を受講している大学生22名に対して予備調査を実施した。8つの社会的集団に関して、17個の形容詞がどのくらいそれぞれの集団に典型的かを尋ねた(「非常に典型的」から「非常に典型的でない」までの5件法)。分析の結果、得点が高く、本研究の題材として適切であると判断した「東京大学の学生は有能である」というステレオタイプを選定した。

### 行動記述文の選定

一橋大学で心理学関連の講義を受講している大学生17名に対して、49個の記述文を提示し、それぞれの記述文がどのくらい有能さを示しているかを尋ねた(「非常に有能だ」から「非常に無能だ」までの5件法)。それぞれの記述文の平均値を算出し、加えて記述文の内容を勘案した上で、有能さを示す記述文と無能さを示す記述文を選定して実験で使用した。

## 実験1

### 目的

実験1では、知覚者の認知資源を操作し、サブタイプ化が生起するかどうかを検討する。サブタイプ化の測定には、成員の記憶とターゲット集団および成員に対する知覚を用いる。

## 方 法

**実験参加者** 一橋大学で心理学を受講している大学生40名(男性26名、女性14名)を対象に実験を実施した。実験参加者は、実験に参加してレポートを提出することで、心理学の成績に加点されると説明を受けていた。

**実験計画** ディストラクション(あり[以下、D条件]/なし[以下、ND条件])の1要因の被験者間要因であった。

**実験手続きと実験材料** 実験は1名から5名の個人または集団で行った。個人または集団はD条件、またはND条件に無作為に割り当てられた。

①**カバーストーリー** 実験参加者に、この実験が対人情報の処理に関する実験であり、実験のなかでは対人情報として東京大学の学生に関する情報を見せらうと説明した。

②**認知資源の操作** 数字を暗唱するというディストラクションの有無によって知覚者の認知資源を操作した(Yzerbyt et al., 1999)。D条件の実験参加者には8桁の数字を提示し、それを暗唱したまま成員情報を見るように教示した。数字を覚える時間は15秒間であった。ND条件の実験参加者には、こうした課題や教示はなかった。

③**成員情報の提示** すべての実験参加者に、ランダムな順序で8名の成員情報を提示した。提示時間は成員情報1名につき15秒間であった。実験で提示した8名の成員情報は、1名ずつカードに記述されていた。カードには、成員の名前とその成員に関する3つの記述文が含まれていた。8名の成員のうち、4名に関しては、すべての記述文が東大生ステレオタイプに一致する情報(有能な行動)であった。残りの4名に関しては、すべての記述文が東大生ステレオタイプに一致しない情報(有能でない行動)であった。

④**成員情報の記憶の測定** ③で提示した24個(8名×3個)の記述文を再度提示し、それぞれの記述文が8名のうちの誰に関するものかを回答させた。24個の記述文は1ページの用紙にランダムな順序で並んでいた。回答時間は5分間であった。

⑤**ターゲット集団および成員の知覚** 次の3つの方法を用いてターゲット集団および成員に対する知覚を測定した。

(a) **印象評定** 東京大学の学生に対して6項目の単極形容詞で評定させた(「非常にあてはまる」から「非常にあてはまらない」までの5件法)。使用した形容詞は「有能な」「頭がよい」「劣っている」「知的でない」「親しみやすい」「社交性がある」であった。

(b) **分布課題** 6つの形容詞対上に、東京大学の学生がどのように分布しているかを回答させた(Linville, Salovey, & Fischer, 1986)。使用した形容詞対は、「有能な—無能な」「頭がよい—頭が悪い」「劣っている—優れている」「知的でない—知的な」「親しみやすい—親みにくい」「社交性がある—社交性がない」であった。

(c) **成員に対する評定** 東京大学の学生の中からランダムに選ばれた人が、有能さや社交性に関する6項目の形容詞に当てはまる確率を回答させた(「0%」から「100%」の10%刻み)。使用した形容詞は印象評定と同じであった。

⑥**その他** 8桁の数字の再生(D条件のみ)、およびデモグラフィック変数を含む付加的な質問項目への回答を求めた。

⑦**ディブリーフィング** 実験終了後、ディブリーフィングを実施した。

④までは実験者の指示に従って実施したが、⑤以降は実験参加者のペースで回答を求めた。実験にかかった時間はおよそ30分であった。

## 作業仮説

**仮説1** ND条件ではD条件と比較をして、上位一下位集団間エラー数よりも上位集団内・下位集団内エラー数が多いだろう。

**仮説2** ND条件ではD条件と比較をして、東京大学の学生を有能であり、有能さに関する変動性を小さく判断する(ステレオタイプの判断する)だろう。

## 結果

すべての成員情報を見ていなかったND条件の1名を分析から除外した。その結果、D条件20名、ND条件19名が分析の対象となった。

**成員情報の記憶の誤り** 成員情報の記憶の誤りは、その種類に応じて、上位一下位集団間エラーと上位集団内・下位集団内エラーの2つに分類した。上位一下位集団間エラー数と上位集団内・下位集団内エラー数については、Taylor et al.(1978)と同様に確率的な補正を加えた。そして上位集団内・下位集団内エラー数から上位一下位集団間エラー数を引いたものをサブタイプ化得点とした。この得点が高いほどサブタイプ化が生じていることを意味する。条件別のサブタイプ化得点の平均値を表1に示した。サブタイプ化得点に関して条件間に差があるかを検討するために、t検定を行った。その結果、有意ではなかった( $t(37)=0.64, ns$ )。

**ターゲット集団および成員に対する知覚** ターゲット集団および成員に対する知覚に関しては、それぞれ有能さに関わる4項目(「有能な」「劣っている」「頭がよい」「知的でない」)の平均を算出した。そしてターゲット集団に対する評定の平均をステレオタイプ得点、成員に対する評定の平均をステレオタイプ化得点とした(クロンバックの信頼性係数は、それぞれ順に  $\alpha=.65$ 、 $\alpha=.68$ )。分布課題に関しては、最初にLinville et al.(1986)と同様に、それぞれの両極形容詞ごとに中心傾向の指標であるM、ちらばりの指標であるSDを算出した。続いて有能さに関わる4項目の平均(「有能な—無能な」「頭がよい—頭が悪い」「劣っている—優れている」「知的でない—知的な」)をMおよびSDごとに算出し、それらを中心傾向知覚得点、変動性知覚得点とした(クロンバックの信頼性係数は、それぞれ順に  $\alpha=.81$ 、 $\alpha=.78$ )。条件別のそれぞれの得点の平均値を表1に示した。

これらの4つの得点に関して、条件間に差があるかを検討するためにt検定を行った。その結果、中心傾向知覚得点とステレオタイプ化得点に関して、条件間の差が有意であった(それぞれ順に、 $t(37)=2.80$ 、 $t(37)=2.95$ 、 $ps<.01$ )。変動性知覚得点に関しては、条件間の差が有意傾向であった( $t(37)=1.69$ 、 $p<.10$ )。D条件と比較してND条件では、ターゲット集団および成員を有能であると判断していた。また有能さに関する次元において、ちらばりを小さく知覚していた。これらの結果は仮説2を支持するものであった。

表1 条件ごとの各得点の平均値(標準偏差)

	ND条件	D条件
サブタイプ化得点 <sup>a</sup>	0.35 (0.57)	0.23 (0.63)
ステレオタイプ得点 <sup>b</sup>	4.08 (0.55)	3.83 (0.58)
ステレオタイプ化得点 <sup>c</sup>	70.39 (13.44)	59.25 (11.39)
中心傾向知覚得点 <sup>d</sup>	4.25 (0.53)	3.87 (0.23)
変動性知覚得点 <sup>e</sup>	2.17 (0.39)	2.38 (0.40)

注) a: 値が大きくなるほどサブタイプ化が生起していることを示している。b: 値の範囲は1~5。値が大きいかほどターゲット集団をステレオタイプの判断していることを意味する。c: 値の範囲は0~100。値が大きいかほどランダムに選ばれた東京大学の学生が東大生ステレオタイプに当てはまる可能性が高いと判断していることを意味する。d: 値の範囲は1~6。値が大きいかほどターゲット集団をステレオタイプの判断していることを意味する。e: 値が大きいかほどターゲット集団の変動性を大きく知覚していることを意味する。

## 考 察

ND条件ではD条件と比較をして、ターゲット集団である東京大学の学生をステレオタイプの知覚していた。この結果は、相対的に認知資源がある知覚者はステレオタイプに一致しない成員に遭遇すると、それらの成員をサブタイプ化し、ターゲット集団全体の判断に一般化しなかったのに対して、相対的に認知資源が欠乏していた知覚者は、ステレオタイプに一致しない成員をサブタイプ化することができず、それらの成員をターゲット集団全体の判断に一般化していた可能性を示唆するものであった。つまりサブタイプ化において認知資源が重要な役割を果たすことを示唆していた。

ただし成員の記憶成績に基づいて算出したサブタイプ化得点では、ND条件とD条件の間で差は見られなかった。成員の記憶の結果に関する考察を進めるために、ディストラクション×エラーの種類(上位・下位集団間エラー数/上位集団内・下位集団内エラー数)の2要因の分散分析を実施した(ディストラクションは被験者間要因、エラーの種類は被験者内要因)。その結果、エラーの種類の主効果のみが有意であった( $F(1,36)=9.39, p<.01$ )。ディストラクションの条件にかかわらず、上位集団内・下位集団内エラー( $M=0.68$ )は、上位・下位集団間エラー( $M=0.38$ )よりも多かった。この結果は、認知資源があるかどうかに関わらず、サブタイプ化が生起していた可能性を示唆していた。

## 実験2

### 目 的

実験2では実験1に引き続き、知覚者の認知資源を操作し、サブタイプ化が生起するかどうかを再度検討する。基本的な手続きは実験1とほぼ同じであるが、いくつかの点で実験の手続きを変更した。第一の変更点は提示する成員情報である。提示する成員は6名、そのうち半数をステレオタイプに一致する成員、残りの半数をステレオタイプに一致しない成員とした。またステレオタイプに一致しない成員の3つの記述文のうちの1つだけをステレオタイプに一致しない記述文とした。第二の変更点はサブタイプ化の測定の方法である。実験1で用いた2つの測定の方法に加えて、ステレオタイプ

に一致しない成員の典型性の知覚の測定も実施した。

## 方 法

**実験参加者** 東京成徳短期大学で社会心理学を受講している女子短期大学生27名が実験に参加した。実験参加者は、実験に参加することによって、社会心理学の成績に加点されると説明された。

**実験計画** ディストラクション(強[以下、D強条件]/弱[以下、D弱条件])の1要因の被験者間要因であった。

**実験手続きと実験材料** 実験は、実験に関する教示、刺激、従属変数の測定などを含む冊子を実験参加者に配布して、集団で一斉に行った。条件によって内容が異なる冊子を用意し、それらの冊子をランダムに配布することで、実験参加者を2つの条件に割り当てた。実験手続きと実験材料は以下の通りであった。

①**カバーストーリー** 「2つの事柄(数字を暗唱することと、人に関する情報を見ること)を同時に行った場合に、どういう結末になるかを調べるための実験である」と説明した上で実験への参加を依頼した。

②**認知資源の操作** 実験参加者の認知資源を操作するために実験1と同様にディストラクションを与えた。すべての実験参加者に8桁の数字を提示し、それを暗唱しながら成員情報を見るように教示した。ただし条件によって暗唱する数字が異なっていた。暗唱する数字はD強条件では「57367142」、D弱条件では「12121212」であった。数字を覚える時間は15秒間であった。

③**成員情報の提示** 認知資源の操作に引き続き、すべての実験参加者に6名の成員情報を提示した。6名の成員情報は冊子の中に含まれていて、1ページにつき1名ずつ記述されていた。それぞれのページには、成員の名前とその成員に関する3つの記述文が含まれていた。6名の成員のうち、3名に関しては、すべての記述文が東大生ステレオタイプに一致する情報(有能な行動)であった。残りの3名に関しては、3つのうち2つの記述文が東大生ステレオタイプに一致する情報(有能な行動)、残りの1つが東大生ステレオタイプに一致しない情報(有能でない)であった。提示時間は成員情報1名につき15秒間であった。提示順序は2パターン用意して、条件間で均等になるようにした。

④**ターゲット集団に対する知覚** 次の3つの方法を用いてターゲット集団に対する知覚を測定した。

(a) **印象評定** 東京大学の学生に対する印象を実験1と同じ単極形容詞で回答してもらった(「非常にあてはまる」から「非常にあてはまらない」までの5件法)。

(b) **パーセント推定課題** 12個の形容詞を提示し、東京大学の学生のうち、それらの形容詞に当てはまる人の割合を0%から100%の整数で回答してもらった。使用した形容詞は「有能な」「頭がよい」「優れている」「知的な」「無能な」「頭が悪い」「劣っている」「知的でない」「親しみやすい」「社交性がある」「親しみにくい」「社交性がない」であった。

(c) **変動性知覚** 東京大学の学生のお互いの性格や能力がどの程度類似しているかを回答してもらった(「非常に似ている」から「非常に似ていない」までの6件法)。

⑤**成員情報の記憶の測定** ③で提示した18個(6名×3個)の記述文を再度提示し、それぞれの記述文が6名のうちの誰に関するものかを回答させた。18個の記述文は1ページの用紙にランダムな順序で並んでいた。

⑥**典型性の評定** 6名の成員(名前と3つの記述文)を再度提示して、それぞれの人物がどのくらい東京大学の学生らしいか回答させた(「非常に東大生らしい」から「非常に東大生らしくない」までの5件法)。

⑦その他 8桁の数字の再生、課題の困難度に関する評定(「非常にやさしかった」から「非常に難しかった」までの6件法)、デモグラフィック変数などの回答を求めた。

⑧ディブリーフィング 実験終了後にディブリーフィングを実施した。

①から③までは実験者の指示に従って進めた。④以降は実験参加者のペースで進めた。実験にかかった時間はおよそ15分間であった。

## 作業仮説

**仮説1** D弱条件ではD強条件と比較をして、上位-下位集団間エラー数よりも上位集団内・下位集団内エラー数が多いだろう。

**仮説2** D弱条件ではD強条件と比較をして、東京大学の学生を有能であり、有能さに関する変動性を小さく判断する(ステレオタイプ的に判断する)だろう。

**仮説3** D弱条件ではD強条件と比較をして、ステレオタイプと一致しない成員の典型性を低く判断するだろう。

## 結果

実験参加者のうち、ターゲット集団に対する知覚の質問項目の回答方法が誤っていた実験参加者1名を分析から除外した。その結果、D弱条件12名、D強条件14名が分析の対象となった。

**操作チェック** 認知資源の操作が有効であったかを確認するために、課題の困難度の評定について条件ごとに平均値を算出してt検定を行った。その結果、D強条件( $M=5.64$ )はD弱条件( $M=3.50$ )と比較して課題が困難であったと評定していた( $t(24)=3.77, p<.01$ )。この結果から、認知資源の操作は成功していたと言える。

**成員情報の記憶の誤り** 研究1と同様に、確率的な補正を加えた上位集団内・下位集団内エラー数から上位-下位集団間エラー数を引いたものをサブタイプ化得点とした。条件ごとの平均値は表2の通りであった。2つの条件の間でサブタイプ化得点に差があるかを検討するためにt検定を行ったが、有意差は見られなかった( $t(24)=0.26, ns$ )。この結果は仮説1を支持するものではなかった。

**ターゲット集団に対する知覚** 実験1と同様に印象評定で使用した有能さに関する4つの形容詞の平均を算出してステレオタイプ得点とした(クロンバックの信頼性係数、 $\alpha=.75$ )。パーセント推定課題については、有能さに関する4つの形容詞(「優れている」「知的である」「頭がよい」「有能な」)の回答の平均から、無能さに関する4つの形容詞(「劣っている」「知的でない」「頭が悪い」「無能な」)の回答の平均を減じたものをステレオタイプ当てはまり度得点とした。

以上の2つの得点と変動性知覚の条件ごとの平均値は表2の通りであった。これらの3つに関して、条件間に差があるかどうかを検討するためにt検定を行った。その結果、変動性知覚について条件間の差が有意傾向であった( $t(24)=1.86, p<.08$ )。D弱条件( $M=2.82$ )はD強条件( $M=3.50$ )と比較して、東京大学の学生の変動性を小さく知覚していた。この結果は仮説2を支持するものであった。

表2 条件ごとの各得点の平均値(標準偏差)

	D弱条件	D強条件
サブタイプ化得点 <sup>a</sup>	0.077(0.33)	0.121(0.49)
ステレオタイプ得点 <sup>b</sup>	4.14 (0.55)	4.00 (0.89)
ステレオタイプあてはまり度得点 <sup>c</sup>	51.56 (19.64)	46.95 (26.07)
変動性知覚 <sup>d</sup>	2.82 (0.87)	3.50 (0.94)

注) a: 値が大きくなるほどサブタイプ化が生起していたことを示している。b: 値の範囲は1~5。値が大きいほどターゲット集団をステレオタイプ的に判断していることを意味する。c: 値の範囲は-100~+100。値が大きいほどステレオタイプに当てはまる人が多いと判断していることを意味する。d: 値の範囲は1~6。値が大きいほどターゲット集団の変動性を大きく知覚していることを意味する。

表3 条件ごとの典型性得点の平均値(標準偏差)

	D弱条件	D強条件
ステレオタイプ一致成員情報の典型性得点	4.67(0.12)	4.60(0.12)
ステレオタイプ不一致成員情報の典型性得点	3.81(0.16)	3.69(0.15)

注) 得点の範囲は1~5。得点が高いほど成員情報がターゲット集団に典型的であると判断していることを意味する。

**提示した成員情報の典型性の知覚** ステレオタイプに一致する3名の成員に対する典型性の評定の平均値と、一致しない3名の成員に対する評定の平均値を算出して、それぞれの典型性得点とした。条件ごとの2つの典型性得点の平均値は表3の通りであった。この平均値について、ディストラクション×典型性得点の種類の分散分析を実施した(前者は被験者間要因、後者は被験者内要因)。その結果、典型性得点の種類の主効果のみが有意であった( $F(1,24)=64.22, p<.001$ )。ステレオタイプに一致する成員の典型性得点( $M=4.63$ )は、一致しない成員の典型性得点( $M=3.75$ )よりも高かった。この結果は、仮説3を支持するものではなかった。

## 考 察

D弱条件はD強条件と比較をしてターゲット集団の変動性を小さく知覚していた。この結果は、仮説2を支持するものであった。実験1と同様に、ターゲット集団に対する知覚の結果は、認知資源がサブタイプ化において重要な役割を果たしている可能性を示唆していた。

しかし成員の記憶の結果は、実験1と同様に、実験2でも仮説を支持していなかった。実験1と同様に成員の記憶の結果に関して、ディストラクション×エラーの種類の分散分析を実施した。その結果、ディストラクションの主効果が有意傾向であった( $F(1,24)=3.34, p<.10$ )。この主効果は、D弱条件( $M=0.54$ )と比較してD強条件( $M=0.63$ )でエラーの種類にかかわらず、エラー数が多いことを意味している。この結果は実験1と比較をして実験2での記憶の測定のタイミングが遅かったこと、そして実験の中で提示したステレオタイプに一致しない成員がそれほど極端に一致しない成員ではなかったことが影響していた可能性が考えられる。

さらに実験2で新たに加えたステレオタイプに一致しない成員に対する典型性の知覚に関しても、サブタイプ化が生起していることを示唆する結果は得られなかった。実験2では、ターゲット集団の評定、記憶の測定を実施した後に、典型性の知覚を測定した。成員情報の提示から典型性の知覚の測定までの間隔が長かったために、条件間の差が見られなかった可能性が考えられる。

## 総合考察

### サブタイプ化における認知資源の役割

実験1、実験2では相対的に認知資源が欠乏している条件(D条件、D強条件)と比較をして認知資源がある条件(ND条件、D弱条件)で、ターゲット集団ならびに成員に対してステレオタイプ的な判断をしていた。この結果は、認知資源がサブタイプ化の生起に影響する可能性、つまりサブタイプ化において認知資源が重要な役割を果たしている可能性を示唆している。しかしながら、本研究の2つの実験で得られた結果はサブタイプ化ではなく、別のメカニズムによって生じていた可能性も考えられる。たとえばGilbert & Hixon(1991)は、知覚者の認知資源があるときにステレオタイプが活性化し、その結果、ターゲット成員に対してステレオタイプ的な判断をするを見出している。本研究の結果もGilbert & Hixon(1991)と同様に、相対的に認知資源がある条件で、ステレオタイプが活性化した結果、ステレオタイプ的な判断をしていたと解釈することもできる。本研究では、この別解釈を排除するためのデータは得られていない。この別解釈の可能性については今後の検討課題である。

成員の記憶の成績に基づく分析、およびステレオタイプに一致しない成員の典型性の知覚の結果については相対的に認知資源がある条件と認知資源が欠乏している条件の間で差は見られず、サブタイプ化において認知資源が重要な役割を果たしていることを示唆する結果は得られなかった。これらの結果は、実験手続き(たとえば測定のタイミング)の問題によるものと考えられる。つまり実験手続きを洗練化させることで解決できるかもしれない。一方、本研究で用いた成員の記憶、ステレオタイプに一致しない成員の典型性の知覚は、サブタイプ化の測定方法としては妥当性に欠けているものであった可能性も考えられる。こうした可能性について、Park et al.(2001)は複数のサブタイプ化の測定方法を比較検討した実験を実施している。その結果、成員の記憶のエラー、ステレオタイプに一致しない成員に対する典型性の知覚、ステレオタイプに一致する成員と一致しない成員の類似性の判断の3つの指標がサブタイプ化の測定に適していることを見出している。このPark et al.(2001)の研究知見から考えると、本実験の結果は測定方法の妥当性の問題というよりも、実験手続きの問題と考えるべきであろう。

### 本研究の問題点と今後の課題

最後に、本研究の問題点と今後の課題を指摘する。

第一に、統制条件を設定しなかったことである。本研究は成員の記憶の測定を実施したために、成員に関する情報を提示しない統制条件を設定しなかった。そのために本研究の結果は、相対的に認知資源が欠乏している条件(実験1のD条件、実験2のD強条件)で、ステレオタイプが変容している(ステレオタイプの判断が低減している)のか、相対的に認知資源がある条件(実験1のND条件、実験2のD弱条件)でステレオタイプが強められたのかがはっきりしない。今後の研究では、成員に関する情報を提示しない統制条件を加えて、ターゲット集団や成員に対する判断の結果を検討する必要がある。

第二に、否定的な内容のステレオタイプを肯定的なものに変容することが可能かどうかという点である。本研究の結果は、肯定的な内容のステレオタイプを否定的な方向に変容するものであった。しかし現実の社会では、否定的な内容のステレオタイプがなかなか変容しないことが問題視されている。今後、否定的な内容のステレオタイプに関しても、本研究と同様の結果が得られるかどうか、検討する必要がある。

## 引用文献

- Gilbert, D. T., & Hixon, J. G. (1991). The trouble of thinking: Activation and application of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 509-517.
- Hewstone, M. (1994). Revision and change of stereotypic beliefs: In search of the elusive subtyping model. In W. Stroebe & M. Hewstone (Eds.), *European review of social psychology*. Vol.5. Chichester, England: Wiley. pp.69-109.
- Hewstone, M., Macrae, C. N., Griffiths, R., Milne, A. B., & Brown, R. (1994). Cognitive models of stereotype change(5): Measurement, development, and consequences of subtyping. *Journal of Experimental Social Psychology*, **30**, 505-526.
- Johnston, L., & Hewstone, M. (1992). Cognitive models of stereotype change(3): Subtyping and the perceived typicality of disconfirming group members. *Journal of Experimental Social Psychology*, **28**, 360-386.
- Johnston, L., Hewstone, M., Pendry, L., & Frankish, C. (1994). Cognitive models of stereotype change(4): Motivational and cognitive influences. *European Journal of Social Psychology*, **24**, 237-265.
- Linville, P. W., Salovey, P., & Fischer, G.W., (1986). Stereotyping and perceived distributions of social characteristics: An application to in-group - out-group perception. In J. F. Dovidio & S. L. Gaertner(Eds.), *Prejudice, discrimination, and racism*. New York: Academic Press. pp.165-208.
- Mauer, K. L., Park, B., & Rothbart, M. (1995). Subtyping versus subgrouping processes in stereotype representation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 812-824.
- Moreno, K. N., & Bodenhausen, G. V. (1999). Resisting stereotype change: The role of motivation and attentional capacity in defending social beliefs. *Group Processes and Intergroup Relations*, **2**, 5-16.
- Park, B., Wolsko, C., & Judd, C. M. (2001). Measurement of subtyping in stereotype change. *Journal of Experimental Social Psychology*, **37**, 325-332.
- Taylor, S. E., Fiske, S. T., Etoff, N. L., & Ruderman, A. J. (1978). Categorical and contextual bases of person memory and stereotyping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 778-793.
- Weber, R., & Crocker, J. (1983). Cognitive processes in the revision of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 961-977.
- Yzerbyt, V. Y., Coull, A., & Rocher, S. J. (1999). Fencing off the deviant: The role of cognitive resources in the maintenance of stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 449-462.
- Zoë, R., & Hewstone, M. (2001). Subtyping and subgrouping: Processes for the prevention and promotion of stereotype change. *Personality and Social Psychology Review*, **5**, 52-73.

## 注

- 1) 本研究の一部は、平成12年度科学研究費特別研究員奨励費(「ステレオタイプ変容の認知的メカニズムに関する実験社会心理学研究」)の助成を受けて行われた。
- 2) 本研究は、日本社会心理学会第40回大会(関西大学)、日本社会心理学会第42回大会(一橋大学)、日本社会心理学会第44回大会(北星学園大学)で発表されたものを加筆修正した。
- 3) 「直接」「間接」という言葉は、相対的な意味で使用している。